

「虚業家」による泡沫会社乱造・ 自己破綻と株主リスク

—大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に—

小 川 功 著

滋賀大学経済学部研究叢書第42号

「虚業家」による泡沫会社乱造・自己破綻と株主リスク
—大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に—

小 川 功 著

滋賀大学経済学部

「虚業家」による泡沫会社乱造・自己破綻
と株主リスク

一大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に—

平成18年2月28日発行

非売品

著者 小川 功

発行者 滋賀大学経済学部

印刷 西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地

TEL (058) 263-4101

はじめに

「彼等ハ各種商品ノ買占売惜ヲ行ヒ法外ナル物価騰貴ヲ来サシメテ民衆ヲ苦シメ、又有価証券ノ価格ヲ不当ニ高下セシメテ民衆ヲ惑ハスノミナラス、斯種ノ思惑ハ最後ニ於テ常ニ失敗ニ帰シ財界ヲ攪乱スルニ至ル。彼等カ真面目ナル事業家、金融業者、乃至一般国民ヲ毒スルヤ大ナリト云フヘシ。銀行業者カ彼等投機師ニ対シテ極メテ厳正ナル態度ヲ執ラレンコトヲ茲ニ重ネテ切望スル所以ナリ」¹⁾

これは大正11年4月6日井上準之助日銀総裁が銀行業者を前に演説した“投機師”に対する警告の一節である。

昨今、堀江貴文、三木谷浩史、孫正義などといった特定領域に棲息する人物の名が当初は球団買収を目論む旦那衆としてスポーツ紙面を賑わせた。最近ではさらに村上世彰を加えたある種の特異体質を有すると思われる人々の派手な経済行動が日々の新聞・放送のトップを飾り、彼らの虚々実々の言動により単に株価だけでなく、日本経済そのものも大きく左右されはじめている。しかし市場経済を信奉する各所管大臣は資本主義社会での自由な投資活動を容認する旨を声明するのみである。²⁾

歴史的なアプローチに立つ著者は彼らの生態を学問的に論評する立場にはないが、彼らとある種の類似点を有すると思われる人物が多数跳梁跋扈した大正期の大戦景気の時期（大正バブル期）の解析にこれまで取り組んで来た。こうした投機的性向の濃厚な人物が銀行・保険・証券などの金融分野に拠点を有して、多くの企業に関係し、株価を煽り買占めを行い、一時的には金融界のみならず、世間一般にも新進実業家などとして持て囃されることも少なくなかった。しかし結果として彼らに眩惑され付和雷同した資本家はもとより、目先の利益に誘惑されて彼らが扇動した投機に乗った一般国民の多くも実に悲惨な結末を迎えたのであった。いわば当時の日本国民の多くがリスク管理に甘かった結果、リスクの顕在化という最悪の事態を招いたのが大正バブル期の一応の総括であ

る。

本書は大正バブル期に盛んに活動した松島肇³⁾という投機的な銀行家・特異な資本家の関わった数十社にのぼる企業群を可能な限り網羅的に把握しようとした個別的研究を通じて、こうしたリスク管理の手痛い失敗の実例を解析しようと試みたものである。筆者のこれまでの極端なリスク選好者・リスク・テーカーたる「虚業家」研究（序章参照）の一環をなすものであり、滋賀大学リスク研究センターの金融リスク等に関する共同研究プロジェクト成果の一部を構成する。本書の主要情報源である新聞・雑誌・会社録・頻出資料等は略号⁴⁾で本文中に直接示した。

また本書には都合で企業名索引・人名索引を割愛した代替策として、①目次に主人公松島肇の関係した企業名を必ず入れた「節」の名前を掲げるとともに、②松島の関係企業（巻末〔表－3〕〔表－4〕）と、松島との関係が濃密なパートナー（第10章参照）には必ず＊印を付して松島との関係の存在をその都度明示し、③＊印を付した人物はまとめて巻末参考資料1の「松島肇のパートナー一覧」に略歴、持株等⁵⁾の判明情報を掲載し、④人名索引の機能を持たせるため五十音順とした。なお松島との関係は一見濃密ではないものの、著者には何らかの「虚業家」的要素を感じさせるような登場人物については適宜注記を行った。いずれこの種の人物についても詳しく言及し、焦点を当てる機会を得たいと考えている。

- 1) 日本銀行調査局『本邦財界動揺史』『日本金融史資料 明治大正編』第22巻、p 728所収
- 2) 本書執筆の学内締切である平成17年9月末時点の著者なりの認識である。その後初校（直前）の18年1月16日以降事態の急変を見たが、あえて訂正を加えないこととした。（平成18年2月10日追記）
- 3) 松島肇にはほぼ同時期に駐ポーランド公使、外務省欧米局長、イタリー大使等を歴任した比較的著名な同姓同名の外交官（国会図書館憲政資料室等に複数の関係文書あり）が存在するため混同されやすいが、全くの別人である。
- 4) （新聞）中外…中外商業新報、時事…時事新報、東日…東京日日新聞、東朝…東

京朝日新聞、読売…読売新聞、国民…国民新聞、報知…報知新聞、朝野…朝野新聞、萬…萬朝報、大毎…大阪毎日新聞、大朝…大阪朝日新聞、大阪日日…大阪日日新聞、徳日…徳島日日新報、徳毎…徳島毎日新聞、日出…京都日出新聞、中国…中国新聞、門司…門司新報、福日…福岡日日新聞、佐賀…佐賀新聞、北海…北海タイムス、岩毎…岩手毎日新聞、岩日…岩手日報、法律…法律新聞、鉱業…日本鉱業新聞、保銀…保険銀行時報、内報…帝国興信所内報、

(雑誌) K…『東京経済雑誌』、D…『ダイヤモンド』、T…『東洋経済新報』、E…『エコノミスト』、藤本…『藤本ビルブローカー銀行週報』、増田…『増田ビルブローカー銀行旬報』、B…『銀行通信録』、R…『鉄道時報』

(会社録) 株…『株式年鑑』野村、大阪屋、諸…牧野元良編『日本全国諸会社役員録』商業興信所、帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所、商…『日本全国商工人名録』、要録…『銀行会社要録』、紳…交詢社『日本紳士録』交詢社、人…『人事興信録』、帝信…帝国興信所『帝国信用録』、商工…『商工信用録』東京興信所、通覧…農商務省編『会社通覧』大正8年12月末現在

(頻出資料) 松島…「松島肇氏と昌栄貯蓄銀行」大正7年10月23日『帝国興信所内報』、内容…「日本綿羊毛織会社の内容」大正9年7月10日『帝国興信所内報 号外129』

大審民…『大審院民事判例集』、大審刑…『大審院刑事判例集』、名鑑…『日本鉱業名鑑』大正7年、名鑑13…『日本鉱業名鑑』大正13年改訂版、「栄華物語」…大阪今日新聞「松島肇栄華物語 上下」(T13.12.21-22徳毎転載)、徳島市史…『徳島市史』第三巻産業経済・交通通信編、昭和58年

なお『銀行会社要録』の記載内容と、同書の巻末索引である「役員録」の記載内容に差異がある場合があるが、誤植・疎漏等のほか「役員録」の「原稿ハ大正九年三月二十日ヨリ『イロハ順』ニ依リ順次締切り、本文会社要録ノ原稿締切ト其時日ヲ異ニスル」(要録T9役上P1)ためと説明されている。よって本文がその後の変更内容を織り込んでいる場合には「役員録」は変更前の状態を示すものと考え

る。

5) 筆頭株主は①のように、持株の順位を○内に示した。

目 次

はじめに

序 章 「虚業家」等の研究史	1
1 「政商」等に関する文献・先行研究	2
2 「相場師」等に関する文献・先行研究	3
3 「虚業家」「会社屋」等に関する研究	6
4 「虚業家」研究の意義と今後の課題	11
第1章 大正バブル期の新興企業と松島肇	19
第2章 松島肇の経歴	27
1 松島肇の略歴	27
2 松島肇の資産形成	30
3 実弟の西条教部	32
4 政治家としての松島	32
第3章 門司築港事件	37
1 西舞子企業	37
2 門司築港プロジェクト	38
3 門司築港㈱	43
4 門築事件	46
第4章 前半期の諸企業関与	53
1 城東木材工業	53
2 東京リベット製造	54

3	安全印刷	54
4	大阪計器製造→大阪計器製作所	55
5	日本絹硝子	56
6	摂津煉瓦	57
7	日本鋼管シャフト	58
8	市岡電気工業	58
9	黒崎電機製作所	59
10	生駒土地	63
11	自動車興業	64
12	日下温泉土地	64
第5章 糸崎船渠事件		69
1	糸崎船渠	69
2	糸崎船渠事件	73
3	海運興業	75
第6章 「幽霊炭坑」事件		79
1	三池炭砒会社	79
2	九州炭砒	84
3	唐津炭砒	87
第7章 日本緬羊毛織事件		95
1	帝国毛織紡績	95
2	大日本原毛紡績	100
3	紡績木管→三光木材工業	102
4	日本緬羊毛織	103

第8章 熱海宝塚土地事件	117
1 熱海偕楽園→伊豆偕楽園	117
2 熱海宝塚土地	119
3 日洋土地興業	124
4 日本土地	125
5 関西計器製作所→大阪計器	127
第9章 徳島県下の事業	133
1 徳島日日新報社	133
2 徳島無尽	139
3 美馬郡是製糸	140
4 第一倉庫	140
5 共正海運→糸崎船渠→海運興業→松島汽船→共正海運	141
6 徳島自動車	142
7 関西土地建物	143
8 徳島木工製作→関西木工	144
9 その他	146
第10章 松島肇のパートナー	153
1 戸水寛人	153
2 鈴木錠蔵	156
3 鈴木久次郎	157
4 松島のパートナー	158
終章 松島肇の功罪	165
1 松島肇の論難	165
2 松島肇の特色	169
3 松島肇の評価	173

〔表―1〕 松島派の黒崎電機製作所持株推移……………	61
〔表―2〕 松島肇・昌栄貯蓄銀行・関係企業年表 ……	181
〔表―3〕 松島肇の兼務先一覧（大正9年～15年） ……	192
〔表―4〕 松島一派の兼務先一覧（上記以外） ……	195
〔表―5〕 戸水寛人の兼務先一覧（上記以外） ……	197
〔参考資料1〕 松島肇のパートナー一覧 ……	198
〔参考資料2〕 「虚業家」とその類語に関連する参考文献・先行研究……………	221

序 章 「虚業家」等の研究史

著者は昭和61年の日本保険学会大会で大阪生命の破綻事例を報告し、主な経営者である岡部廣を「実業家というよりは虚業家であり…天才的詐欺師に近い存在¹⁾」であると結論付けた。もちろん「虚業家」という用語を破綻経営者等の性格を形容する言葉として使用するのは著者のみではなく、遅くとも明治20年代にまで遡ることが可能である²⁾。

著者が最初に「虚業家」の概念を構築するにあたって着目した人物評は「彼の言動は一も信を置くに足らず既往の事蹟を聞くに殆んど皆失敗に終り負債は一時数百万円の巨額に上り今猶数十万円を有し実業界の一大怪物を以て目せらるる人³⁾」「人物真価が不明…実に不可思議千万な人物」という人物形容であった。

一方で金子直吉、久原房之助など二流以下の財閥・商社等の経営者などの中には、旺盛な企業家精神に押されて、リスク管理能力が相当疑問視される企業家も存在するように思われる。たとえば郷誠之助は金子直吉を「稀に見る天才肌の実業家…惜しいことには、本当の締めくくりが付かない…纏った統制が付いて居ない」と評して「金子の頭の欠陥は、直ちに鈴木商店の致命傷⁴⁾」と看破した。郷の指摘するように、企業家精神を大いに発揮しつつも企業家として最終的に成功するためには、次々に遭遇する危機を回避・突破するリスク管理能力をも同時に兼ね備えていることが当然に要求される。もしリスク管理能力に乏しい企業家が事業に成功したとしても、それは単なる偶然、僥倖の所産なのであろうか？もし成功と失敗とを分ける要素が単なる偶然の産物でしかないと仮定すると、健全な「企業家精神」と、万一の僥倖のみを当てにする「投機」とを区別する意味はなくなり、ひいては「企業家」と「投機家」とは全く同義語ということにもなりかねない。やはり「企業家精神」には、おのづから限度、許容範囲というべきものが存在して、「企業家精神」の度を越した過剰は無謀な「投機」との区別がなくなると考えるべきではなかろうか。

著者の見るところでは破綻した銀行や金融機関の中には経営者が「企業家」と「虚業家」の中間的存在というよりはむしろ「虚業家」に限りなく近い、抑制因子が機能なくなると即座に「虚業家」症状を発症するようないわば「境界型」であった事例も『銀行事故調・全』に見るごとく決して僅少ではないように思われる。そこで著者は明治以来の「虚業家」等の用例を調査した上、「虚業家」の共通性として、①虚飾性、②モラルの欠落、③リスク管理能力の欠如、④「策士」的要素、⑤「相場師」的要素、⑥誇大妄想傾向、⑦「成金」性など非「企業家」的諸要素群に集約できるのではないかと考えた。

しかし明確に「虚業家」と銘打った文献や学術研究は研究史をひもとくにはあまりにも数が少なすぎる。そこで主に「実業家」「企業家」等の反意語として使用される「虚業家」を、類義語・周辺語と考えられる「山師」「相場師」「買占屋」「会社屋」「總會屋」「成金」「策士」「政商」等とともに、可能な限り広範囲にとらえて、これらを研究課題とした著書・論文等を刊行順に列挙すれば、巻末の〔参考資料2〕の通りである。以下本章でとりあげる著書・論文等の書誌情報は巻末の通りで、個々の注記は省略した。なお金融危機・金融恐慌等に関する研究動向⁵⁾、「虚業家」やその類義語・周辺語に関する用例・書誌⁶⁾に関しては著者は別に詳述しているのでここでは繰り返さない。

1 「政商」等に関する文献・先行研究

〔参考資料2〕のうちまず「政商」に関しては山路愛山が『現代金権史』の中で「政府が自ら干渉して民業の発達を計るに連れて自ら出来たる人民の一階級」と定義したのをはじめ、「政商」の定義を巡り様々な議論が展開されてきた。岩下清周ら「政商」的人物を多数取り上げた列伝としては三木幾太郎『疑問の人』などがある。

「政商」に関して代表的な学術書として土屋喬雄氏の『日本の政商』がある。土屋氏は政商を「政府者との個人的関係よりして、政府の保護又は御用を受けたもの⁷⁾」と意義付け、「その関係に不公正なものが伏在する必然であり、そこから奇利とか暴富とかいわれるものが生れる⁸⁾」とした上で、客観化しえない「あ

まりに生々しい、新しい『政商』については、省略⁹⁾して近世から明治期までの10名の日本の政商列伝を著した。ほかにも小林正彬『政商の誕生』など多数の先行研究がある。

次に「策士」については古くは鶴崎鷺城『当世策士伝』、近年では小島直記『日本策士伝』等が散見される程度で、歴史的ないし学術的用語ではないためか、管見の限りでは纏まった先行研究は乏しいように思われる。「成金」を冠する文献も『明治大正成金没落史』、成金で買占め本人の千原猪之吉の自著『成金物語』など極めて数多い。近年では邦光史郎「成金列伝」、梅津和郎『成金時代』などもある。

2 「相場師」等に関する文献・先行研究

「相場師」「買占屋」等に関しては日本証券経済研究所で小林和子氏らが編纂した『日本証券史資料 戦後編別巻一 証券関係文献目録』に多数収録されている。まず株式仲買人等の評伝としては『兜街繁昌記』明治45年、p174以下の「株式仲買人総評」、奥村千太郎（元相場記者）の『株式放資と売買術』、米穀、三品を含む大阪の仲買人全般は大阪毎夕新聞記者の岡村周量（蒼天）自身による記事や、「毎夕在社中、閑を偷んで書き集めたもの」（『黄金の渦巻へ』序）を退社を機に独自出版した『黄金の渦巻へ』等に詳しい。相場師の回顧談を収録した『相場実話』、『相場今昔物語』、個別の相場師の伝記としては『風雲六十三年・神田鐺蔵翁』など多数ある。

奥村千太郎（元相場記者）の『株式放資と売買術』は株式仲買人はもちろん石井定七、「成金」千原猪之吉といった著名な投資家・投機家まで多数取り上げて彼らの放資・売買術を議論しており、虚業家列伝に近い著作の一つと位置付けられる。また代表的な『北浜盛衰記』、『兜町盛衰記』などをはじめとして多数存在し、近年でも『相場師異聞』『東京の米穀取引所 戦前の理事長』のような相場師列伝がいくつか出版されている。もちろん明治26年刊行の瀬川光行¹⁰⁾『商海英傑伝』をはじめ、『大阪財界一百人』のような人物列伝には必ず相場師や投機家（例えば『財界物故傑物伝』には松谷元三郎ら）が収録されているが、こ

ここでは省略する。

買占め、乗取りに関わった「相場師」投機家らを主な対象とした著作には新聞記者等がジャーナリスティックな関心から調査したものが少なくない。買占めについては安田与四郎『株式市場の裏表』など通俗的な解説書・入門書の類にも必ず記述があるほか、今村・井上などによる九州、関西、参宮鉄道等の買占めについては野城久吉『商機』に詳しい。買占事件の事例集成では銀行問題研究会から刊行された『買占物語』が類書に先行している。さらに近年では森川哲郎『乗取り百年』、奥村宏『買占め乗取り・TOB』等がある。

証券市場に関係する島徳蔵、野村徳七、神田鑄蔵らに関連する先行研究には相当の蓄積がある。証券業者全般については野田正穂、森泰博、小林和子、二上季代司らの各氏による証券史研究成果の多年の蓄積があるが、代表的な一部分だけを巻末に掲げた。北浜の証券業者に関してはまず宮本又次氏が『大阪商人太平記』等において多数の列伝を取り上げた。証券界以外でも藤田伝三郎のパートナーである中野梧一¹³⁾という人物の不可解さは「虚業家」的要素との重複が認められる。

菅野和太郎氏は島徳蔵を「会社屋」と規定した上で、「彼は多くの会社を発起した際に、少なからぬ不正行為をなしたかも知れないが、同時に彼の活動が、延いて会社企業心及び株式会社知識を世人に扶殖したことは、何人も否定し得ない¹⁴⁾」として「彼の功罪は相半す¹⁵⁾」と断じた。また「虚業家」という用語を論文の中で初期に使用した三島康雄氏は昭和40年4月の論文の中で島徳蔵を、「真似ることのできない一種の天才的な才能を持って…怪腕を揮って大阪財界を引ずり回し、株式界の王者として君臨した一代の梟雄であり、不世出の虚業家¹⁶⁾」と評した。湯沢威氏執筆の『阪神電気鉄道八十年史』も「奔放な言動がしばしば世間の注目を集めた」社長島徳蔵を、「天性、相場師のひらめきを持っていた」「当社の最高経営者の中では異色の個性¹⁷⁾」と評した。

三島康雄氏は『阪神財閥』において「強気の勝負師としての野村徳七を冷静に抑制する参謀役であった弟の実三郎¹⁸⁾」と兄弟を対比するとともに、「前半生を投機的な相場師として生きてきた徳七」が「南洋狂」と呼ばれたほど「海外事

業に対する異常なまでの熱意と執着¹⁹⁾」を死の直前まで持ち続けたとしている。

霧見誠良氏は「証券財閥」の分析の中で証券業者を①鈴木久五郎、高倉藤平ら「取引所の定期取引を利用して一獲千金を夢みる」「投機に生きる人々」すなわち「相場師」タイプと、②小池國三、野村実三郎、遠山元一ら「取引も現物か当先の値鞘稼ぎに終始し、顧客の信用を重んずる堅実路線を志向する人々」²⁰⁾すなわち相場師気質を嫌うタイプとに二分する。そして今村清之助、小池國三、野村徳七らは「信用を重んじる堅実な資質と投機家業との矛盾、株屋という蔑視を逃れたいという一念」²¹⁾から、いずれも証券業者から投資銀行への転身を志向したとする。そして野村の成長は「果敢な徳七と慎重な実三郎」²²⁾という絶妙なりスク・バランスで可能となったと見る。

神田鐮蔵について野田正穂氏は本業で大きなリスクを伴う公社債の「買戻保証」の開発などに加え、「『金融財閥化』を夢みてその事業を急速に拡大」²³⁾する不健全な傾向を指摘した。

また麻島昭一氏も消滅信託の研究の中で「諸欲の強い野心家」²⁵⁾で「積極かつ放漫な経営のためいろいろな批判のある証券業者」²⁶⁾の神田鐮蔵や増田信一などを含む日米信託の経営陣全般に対して「金融機関を堅実に運営していく能力と経験を有する者は少なく、日米信託の暴走をコントロールできなかった」²⁷⁾と判断し、「いずれものちに主宰事業が破綻する悲運を背負った人物」²⁸⁾との評を与えている。麻島氏のいう「多くの金融機関が尻込みする…敢えて人のやらない危険な金融に乗り出し」²⁹⁾た日米信託の積極、放漫、暴走、破綻の「悲運を背負った人物」たちは、用語は異なるものの著者の想定する「虚業家」的要素と相当に重複する領域があるように感じる。なお大阪の現物団・証券業者について早くから着目された森泰博氏は「晩年の藤本清兵衛は、もはや企業家とはいえない」³⁰⁾として藤本ビルブローカー退任後の藤本清兵衛の「虚業家」的行動には関心を払わない姿勢をとる。また小林和子氏も最近東洋精糖買占事件の主人公・横井英樹などについて論文を発表している。

3 「虚業家」「会社屋」等に関する研究

「虚業家」および比較的近い語感の「会社屋」等に関する研究史について概観を試みたい。まず「虚業」そのものに関しては水沼知一氏によれば「虚業」は当時「『実業』の反対概念としてかなり広く通用³¹⁾」したとされ、国家的事業と位置付けられた「実業」に対し「虚業」は「『私』的利害のみを専ら関心事とする³²⁾」と捉えられる。しかし背景にある経済思想により企業家と虚業家とを判別するとの水沼説は、渋沢栄一自身も当時において国益的の事業とそれ以外との判別は困難だと断じたのと同様に無理があり、現時点で著者としてはむしろリスク選好度・リスク管理能力如何に求めるべきではないかと考えている。

その後、岩田龍子氏は主に昭和期の関係文献を利用して『虚業の研究』を刊行、「虚業」に関する唯一に近い単行本の研究書となっている。『中野金次郎伝』の著者の村田弘は中野金次郎と交流のあった“虎大尽”山本唯三郎について「日本虚業家列伝でも編纂されるようなことがあれば、彼など、さしずめその第一ページを飾る存在³³⁾」と評しているが、『日本虚業家列伝』といった著作の存在は寡聞にして知らない。

「会社屋」という用語を使った論文としては菅野和太郎氏の前述「会社屋」という短編があるほか、「虚業家」、「会社屋」等という用語そのものに関して学術的な関心から遡及して検討した先行研究や文献は管見の限りでは数少ないように思われる。そこで「虚業家」という特定語を使用した研究ではないが、著者の目から観察して、多分に上記のような「虚業家」的要素をも兼ね備えた経営者の個別研究の例としてまず金子直吉を挙げておきたい。

金子直吉に関する先行研究は膨大なものがあるが、桂芳男氏は『関西系総合商社の原像』の補論に「鈴木商店と金子直吉の人間像」を収めている。桂氏は金子に対する「山師とかペテン師か…天才か狂人か」「事業魔とか借金魔」「世界一の借金王」「政商」などの世評を列挙した上、彼の人間像を15項目に整理した結論として「事業の鬼³⁵⁾」としての金子「直吉さんの旺盛過ぎる事業欲が、不況の深刻化とともに関連企業への膨大な投資資金の固定化を累積³⁶⁾」させたもの

の、真の姿は「卓越した独創的で革新的な企業家」³⁷⁾と高評価する。辻節雄氏も金子直吉に関して①独断専行、②経営の近代化を回避、③資金の固定化…柔軟さを欠く、④国益志向を盾とした拡張第一主義、⑤政商的などを鈴木破綻の要因として列挙している。³⁸⁾

浅野総一郎、金子直吉、久原房之助、茂木惣兵衛、野口遵などの企業家精神の旺盛な経営者に共通する原因は未経験者主導の組織にありがちな攻撃一方で守備を欠く、内部管理・リスク管理の不在にあった。三井をモデルとした古河、浅野などの二流財閥は商社、銀行への進出を果たしたものの、後始末に追われ一流財閥になれなかった。貿易、海運、造船、製鉄などの分野で大戦ブームに便乗して貿易、銀行を含め多角化した藤田、久原、川崎=松方、鈴木、高田、渡辺、若尾などの中堅財閥・資産家も相場暴落で傘下事業に甚大な打撃を受け崩壊ないし衰退した。商社でも茂木商店を始め、古河商事、久原商事、湯浅貿易、渡辺商事、安部幸兵衛商店、増田貿易などの京浜所在の準総合商社・貿易商などが多数整理を発表し、震災後も高田商会などがこれに続いた。久原房之助の久原商事は新進学卒者を幹部に登用して世界中に商圏を急拡張したものの、現場の裁量に一任した暴走型商社の典型であると評価できる。20歳で茂木商店を継いだ三代茂木惣兵衛に関しては茂木合名を設立、1916年頃から貿易業務を拡張、茂木合名に製糸、呉服、地所、鉱業、商工、船舶、企業の各部を置いて多角経営を展開した。破綻時の総損失は1億円近くに達し、融資した銀行は約一割しか回収できず、茂木に必要な資金を供給したため同系七十四銀行も破綻した。³⁹⁾

前述した金子直吉（鈴木商店）の場合と同様に、浅野総一郎（浅野財閥）、久原房之助（久原鉱業）、茂木惣兵衛（茂木商店）などに代表される二流財閥・商社等の研究も、ある面では「虚業家」研究と重なり合う部分があると考えが、あまりに膨大なためにここでは言及を割愛する。ここでは数名の研究者の研究の中から、著者に「虚業家」的側面を感じさせた経営者の例を示すこととした。

まず大塩武氏による日窒コンツェルン創業者の野口遵の研究によれば、「野口の企業者活動は、決して場当りのなものではなく…企業家としての広い視野の